
はじめに

がんゲノム医療は、がんの本質に迫る分子レベルでの診断と個別化治療の実現を目指して近年、著しい発展を遂げてきました。2019年の保険収載以降、がん遺伝子パネル(comprehensive genomic profiling : CGP)検査やコンパニオン診断(companion diagnostics : CDx)の外部委託件数は急増し、わが国においても多くの医療機関で日常的に実施されるようになり、専門的な用語を基礎から学ぶために2020年に増刊号「がんゲノム医療用語事典」(64巻10号)を発行しました。その後、数年が経過しましたが、病理検査室において実際にどのような検体処理や対応が求められているのか、また臨床検査技師がどのように業務に関与しているのかといった具体的な実務情報については、依然として十分に共有されているとは言い難い状況にあります。

特に病理検査の現場においては、固定・包埋・切片作製・品質管理といった検体前処理のいわゆる“Wet”なプロセスや、検査後のデータ解析を含むバイオインフォマティクス領域など、通常の病理診断とは異なる視点や知識が求められます。こうした領域は、日常の業務だけでは体系的に習得することが難しい場合も多く、確かな実務知識と経験の共有が、がんゲノム医療の質の向上に直結すると考えられます。

本増大号は、がんゲノム医療の実践において現場で求められる知識や手技、考え方について、できる限り具体的かつ平易に解説することを目的として企画しました。病理検査室で実際にがんゲノム検査に携わる方々が“今知りたい”“すぐに役立てたい”と感じる情報に的を絞り、現場における工夫や注意点、患者さんへの貢献に直結する視点を随所に盛り込んでいます。

臨床医や病理医の先生方に執筆いただいた項目も含まれており、診療現場の視点や、がんゲノム検査における切り出しの意義、腫瘍量の確保といった病理実務と臨床判断が交差する重要な論点についても触れています。これによって、検査の成功率や検体の有用性を高めるために、どのような連携と配慮が求められるのかを多角的に理解できる構成となっています。特に、紹介元施設における標準化の重要性については、全ての医療機関が共通認識をもつべき課題と捉えています。

本増大号が、がんゲノム医療に関わる臨床検査技師や病理医のみならず、医師、看護師、薬剤師、遺伝カウンセラー、コーディネーターをはじめとする多職種の皆さまにとっても有益な実践ガイドとなり、また、それぞれの立場での理解と連携、そして日々の業務における自信を深める一助となれば幸いです。

柳田絵美衣
